

受講番号 19068 学校名 大津中学校 氏名 成岡 真子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 35名
 科目名 1年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course 1

クラスの様子・特徴

穏やかで優しい性格の生徒が多く、ペア学習も和やかに取り組むことができる。何かを取り組もうとするときに、全体から遅れがちな生徒が数人いるが、おおむね学習に前向きにがんばろうとする生徒が多い。

問題の確定

生徒が英語を発音することに慣れる。そして英語を使おうとする態度や意欲と英語を話す技能を身につける。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
1学期中間テストを終えたところで、レポートする声小さくなってきた。これに注目して生徒を観察すると、「読み方がわからない」という生徒が意外に多かった。そこで「生徒が英語の読み方に困っている」と捉えて授業の組み立てを見直すことにした。	07年5月実施の授業アンケート「英語学習のなかで、難しいと思うことは何か。」→話す練習32%(1位)「英語の授業でどんな力を身につけたか」→話す力27%(同率1位)「話すことは難しいが、できるようにになりたいと思う生徒が多い」と分析した。	語句テスト平均(4月～5月)82.5点(6月～7月)77.1点 speaking test(1学期)14.48点/16点(2学期)14.37点/16点

リサーチ・クエスト

基本文型を使って自己表現する力(話す力)をつけさせる指導をどうすればよいか。ゴール:1年終了時には、ALTに対して自分や友達のすることなどを英語で言うことができる。

仮説・実践・検証

仮説1	実践1	検証1
基本文の口頭練習を毎時間行っていけば、基本文が定着するだろう。	まず始めに「耳→音、目→文字、手→文字の形状を取得すること」を意識させて、形態を一斉個人→ペアの順で発音練習をさせた。その後、ワークブックなどのドリル問題に取り組んだ。また、interview gameやreading(20秒間で本文を何行読めるか)& writing(3分間で本文を何文書けるか)practiceを行って、班競争させた。	発音練習は授業のたびに取り組んだが、interview gameやreading practice, writing practiceはunitに1回ずつ取り入れた。Interview gameではインタビューした人数を記入する欄と一言感想欄を設けた。その結果、「いろいろな人と英語で話すのは、難しいけど楽しい」という意見がだんだん増えてきた。これはコミュニケーションへの意欲の高まりだと捉えた。
ALTに発表(speaking test)する台本を作っておけば、生徒が自信を持って英語を話すことができるだろう。	1学期は「自己紹介」2学期は「友だちや家族、ペット紹介」のテーマでワークシートに台本を準備させた。好きなスポーツや実際にしているスポーツ、演奏する楽器、得意なことなどを台本に盛り込むようにさせた。また、2学期のテーマの台本は、色画用紙に清書させて文化祭の教科展示作品とした。	学期ごとにそれぞれのテーマで台本を各自が用意したが、その作成には非常に時間を要した。それだけに生徒たちの満足度は高く、「台本作りの時間には、自分で文を作ろうと頑張りましたか。」の項目に「はい」と答えた生徒は1学期に76%、2学期には81%という成果を得ることができた。だが今後のカリキュラムと授業時数を考えると、もっと効率的にspeaking testを導入する必要がある。
ALTとの対話(speaking test)で自分の英語が相手に通じたら、「英語で話せた」という喜びが得られて自信になるだろう。	教師1対生徒1で行うので、時間の関係でspeaking testはALTと私がinterviewerになった。本番では①台本を暗唱してくる。「どうしても自信がない」という人だけ台本を見てもよいが、「態度」から減点になる③授業始めにする挨拶をする④先生の目を見て話す④先生からの質問に英語で答えること、を条件に実施した。採点は各4点満点で、項目は①態度②流暢さと声の大きさ③発音と抑揚④会話とした。	普段は1対1で改まって話さないで生徒が大変緊張しており、暗唱するだけで精一杯、発音は二の次、といった様子だった。自己評価表「自分の英語が先生に通じたと思うか」の質問に「はい」と答えた生徒が1学期79%、2学期65%いた。2学期の数値が1学期よりも低下した理由に、①三単現の文が難しく感じられた②自分のことではなく、自分が紹介した人について質問されるので答えるのに難しかった、ことが挙げられる。

研究の成果

2回のspeaking testと文化祭展示品作成を通して考えたことは、「表現活動＝個性を出せる活動」を好む生徒が私が考える以上に多かったということだ。speaking testの自己評価表「よかったところ」には「先生が言っている英語がわかった。」「相手の目を見て覚えたことを全部話せた。」「うまく発音できた。」など努力の成果を自ら評価した生徒が多かった。これは、教師が一人ひとりの発表を見て評価を返すことができたことに起因するのではないか。「これからがんばるところ」には「英語の発音と聞き取りをがんばる」とリスニングにも意欲を出し、自分で課題を見つけた生徒もいた。

今後の授業改善の課題

speaking testで英語を話す自信をつけさせることはおおむねできたと思う。今後は台本を卒業して、絵を見て書かれてあることを英語で表現するといったような方法でspeaking testを行ってみたい。それには今までとは違うバージョンアップした導入が必要だ。また、学力テストなどの結果から書く力をつけさせる必要がある。話す・書くの表現力をつけさせるにはどうするべきかを現在模索中である。

リサーチについての問合せ先: 職場電話 088-866-2444